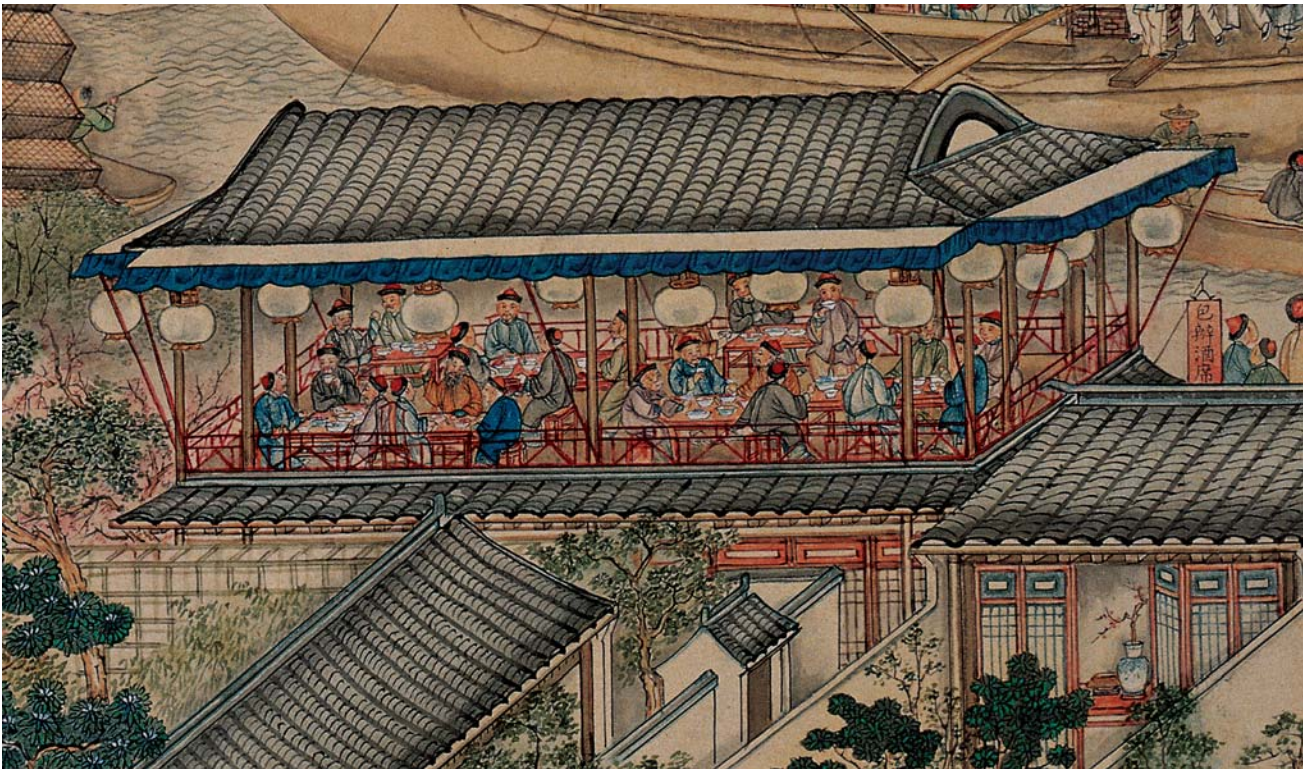
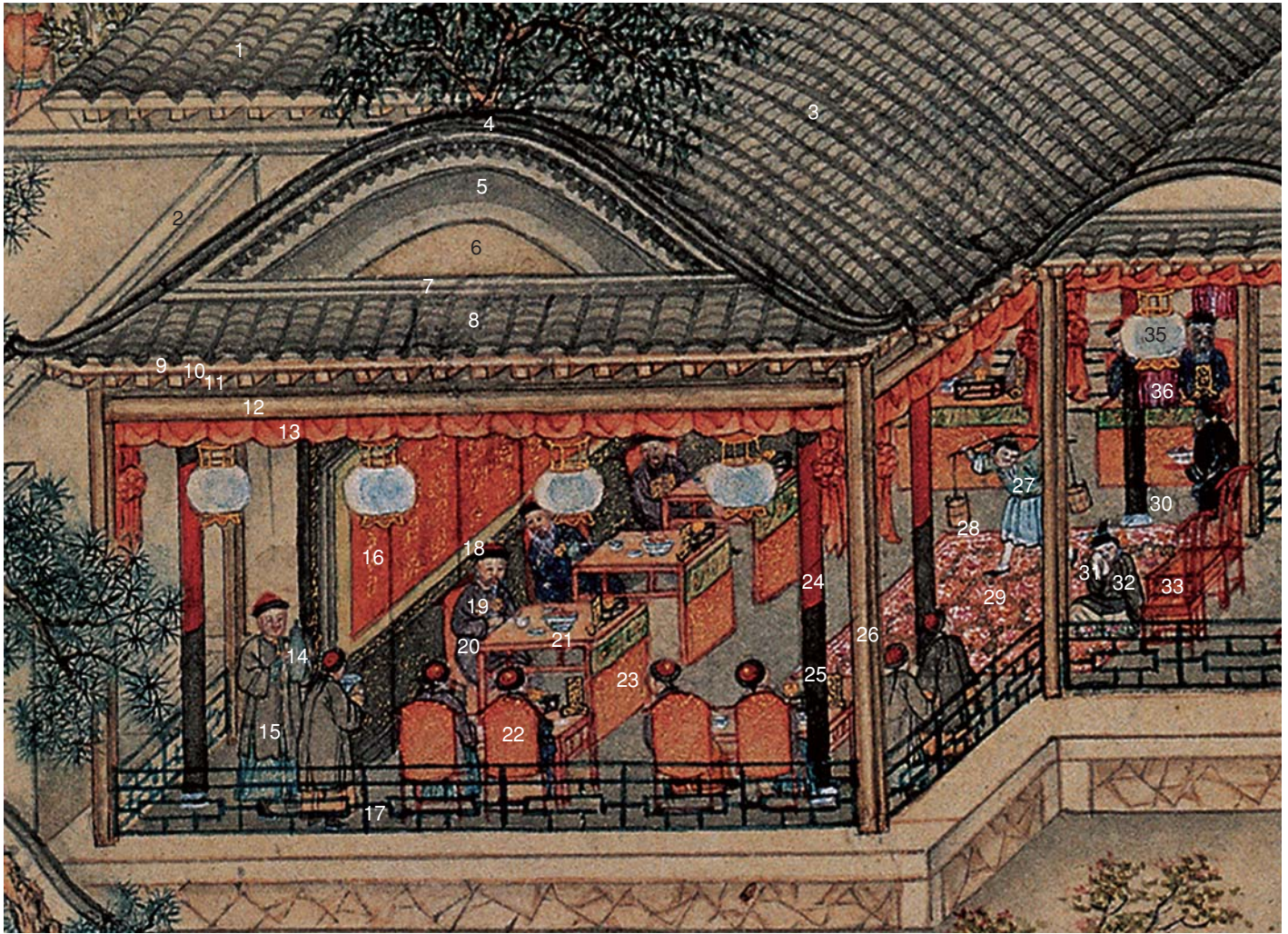


IV

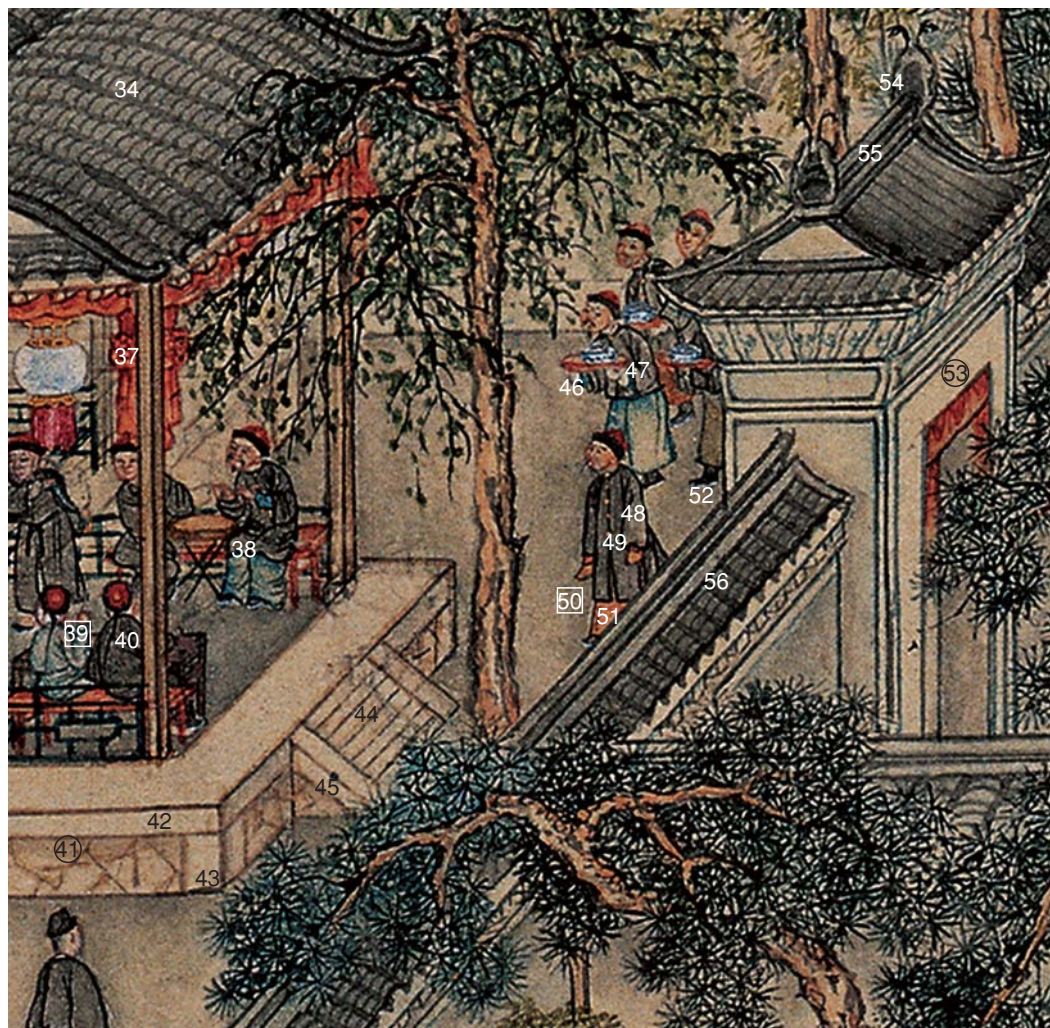
喜びと楽しみ



33 屋敷での観劇



- | | | |
|----------------|------------------|------------------|
| 1 瓦屋根 | 23 卓子のまえかけ（卓幃） | 45 耳石（垂帶石） |
| 2 塀（囲牆） | 24 対聯 | 46 盆（托盤） |
| 3 瓦屋根（卷棚歇山頂） | 25 本柱（金柱） | 47 給仕する召使い |
| 4 棟（簷頭脊） | 26 側柱（檐柱） | 48 上着（外套） |
| 5 破風（博風） | 27 役者〔脇役〕（雜） | 49 釦 |
| 6 妻壁 | 28 水桶 | 50 手甲袖（馬蹄袖）で手を隠す |
| 7 前包み（博脊） | 29 舞台に敷く赤い毛氈（氈氍） | 51 長着（袍子） |
| 8 平瓦（青瓦） | 30 礎盤（柱礎） | 52 布製の長靴 |
| 9 軒瓦（滴水） | 31 舞台衣装の長い袖（水袖） | 53 門 |
| 10 瓦座（封檐板） | 32 役者〔若い女性役〕（旦） | 54 鷗尾（正吻） |
| 11 垂木（椽） | 33 大道具 | 55 大棟（屋脊） |
| 12 長押（椽枋） | 34 ポーチ（抱廈） | 56 築地塀（囲牆） |
| 13 飾り暖簾（彩綱） | 35 網張りの提灯（紗燈） | |
| 14 ちろり（錫酒壺） | 36 ふさ（流蘇） | |
| 15 召使い（小厮） | 37 薬玉（彩球） | |
| 16 屏風 | 38 楽師 | |
| 17 欄干 | 39 横笛を吹く | |
| 18 帽子（暖帽） | 40 辮髪 | |
| 19 官位を示す飾り（補子） | 41 基壇（台基） | |
| 20 補子のある上着（蟒衣） | 42 葛石（階条石） | |
| 21 鉢（菜碗） | 43 束石（角柱石） | |
| 22 椅子カバー（椅套） | 44 石段（踏磴） | |



花庁で宴会を開きながら演劇を楽しむ光景が見える。「花庁」とは、宴会や観劇、接客などで用いる内庁で、庭園に建てられ、花木に囲まれるため、俗称は花庁という。こうした建物を開放式にする建築様式は、「亭榭式」という。

自宅で宴会を開きながら演劇を観賞することを「堂会」といい、その多くは祝い事かもてなしのために行う。堂会で演技をすることは「唱堂会」という。ここに見られるのは、典型的な堂会的一种である。主客は宴会を楽しみ、広間の中央の赤い毛氈の

上で芝居が演じられる。舞台は特に設けられないが、正式な舞台と同じように、椅子二つと机一つの簡単な道具を設置し、楽隊をその後ろに置く。屋敷内に舞台を設ける家もある。

正面にある三つの席は、地位の高い客の為に設置したものである。中でも、中央の席は首席といい、最も尊貴な客が座る。正面の席に座る三人の客の上着に、「補子」という官位を示す飾りがあり、彼らは官僚であることを物語っている。この「補子」のついている上着は、蟒衣という。(彭)

34 村芝居に集まる観客



村芝居を行う「草台」という臨時舞台とその周りに集まっている観客を描いている。中国の農村では、空地に構えた舞台での芝居の上演は、数少ない娯楽として非常に重視され、多くの人が集まってくる。それをあてにして簡単な食事を提供する露店が開かれる。舞台の下に、すでに天幕を張って営業している露店が見られる。

「草台」でありながら、ここに見られるのは普通の臨時舞台と違って、形も機能も完備しているもの

である。材料は主に蓆と竹であるが、宮廷舞台のような屋根を持ち、多くの装飾が施されており、蘇州や揚州に見られる「花台」のようである。また、これは典型的な中国式の舞台であり、床が高く、三面開放式で、舞台裏は奥の方に設置し、登場口と退場口はその正面にある。舞台には机一つと椅子二つだけを置き、芝居の中の世界をすべて表現する。そして、固定舞台の「看楼」に準ずる棧敷が備わっており、そこに座るのは女性と子供のみである。安全の

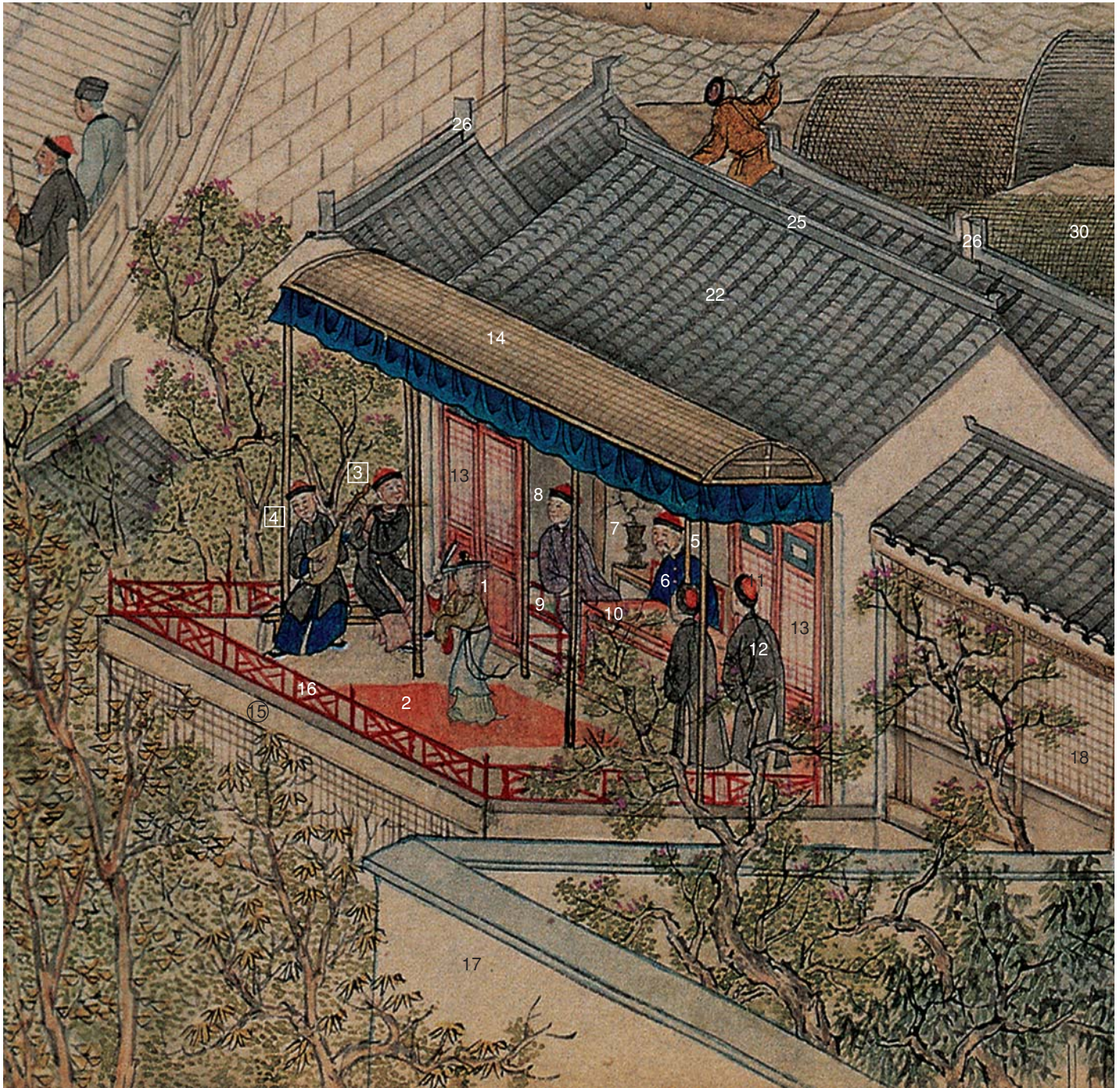


- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1 大棟 (屋脊) | 36 女性 |
| 2 棟飾り (宝塔) | 37 まげ (髻) |
| 3 鷗尾 | 38 上衣 (短衫) |
| 4 葦屋根 (草頂) | 39 スカート (裙子) |
| 5 降り棟 (垂脊) | 40 指差す |
| 6 隅棟 (戩脊) | 41 芝居に足を止める |
| 7 入母屋 | 42 風呂敷 (包袱) |
| 8 前包み (上檐博脊) | 43 棧敷 |
| 9 軒 (上檐) | 44 観客席で観劇する女性 |
| 10 前包み (下檐博脊) | 45 腰掛けに上がって観劇する |
| 11 軒 (下檐) | 46 腰掛け (板凳) |
| 12 八角形の窓 (八方式窓) | 47 観客席にいる子供 |
| 13 欄干 | 48 簾 |
| 14 登場口 (上場門) | 49 帽子 (暖帽) |
| 15 退場口 (下場門) | 50 上着 (外套) |
| 16 楽師 | 51 手甲袖 (馬蹄袖) で手を隠す |
| 17 舞台の床 (台板) | 52 長着 (袍子) |
| 18 役者 [脇役] (丑) | 53 布製の長靴 |
| 19 扇子 | 54 木に登って観劇する |
| 20 役者 [脇役] (雑) | 55 長命鎖 |
| 21 桴 (槌) | 56 老婦 |
| 22 小太鼓 (花鼓) | 57 杖 |
| 23 絹張りの提灯 (紗燈) | 58 藁靴 (草鞋) |
| 24 舞台に敷く赤い毛氈 (氈氈) | 59 笠 |
| 25 束柱 | 60 船の屋形に上がって観劇する |
| 26 薬玉 (彩球) | 61 露店を開こうとする男 |
| 27 物を渡す | 62 長腰掛けを担いでくる |
| 28 梯子 | 63 上着 (短衣) |
| 29 日覆い | 64 舵柄 |
| 30 客 | 65 舵 |
| 31 机 | 66 凭れ掛かる |
| 32 長腰掛け (長板凳) | 67 手提げ籠 (籃子) |
| 33 畦 | 68 橋 |
| 34 水田 | 69 木の欄干 |
| 35 子供 | |

ためでもあるが、儒教の「男女有別」の思想も働いていると思われる。

舞台の前に多くの観客が集まっている。より高い足場を求め、腰掛けや橋に上がっている人や、長腰掛けを担いでくる人、船の屋形や木に登っている人もいる。舞台が水辺にある場合、船で来て、岸に上がらず、そのまま船で観劇する人も少なくなかったようである。(彭)

35 露台の踊り子



石湖の北を通り抜け、獅子山の麓を通過してさらに東へ進むと、いよいよ蘇州城に近づく。蘇州城の外郭を流れる胥江は商業地の棗市街へとつながるが、その手前に太鼓橋の懷胥橋がある。この場面は、その懷胥橋の手前にある瓦葺屋敷の露台上で、琵琶や横笛の伴奏に合わせて、踊り子が舞を披露する光景が描かれている。露台は朱色の手すりがつけられ、

中央には朱色の毛氈が敷かれており、客を招いた小宴が開かれている。一人の樂師は横笛を、もう一人は琵琶を爪弾いているなか、踊り子は体を捻りながら軽快に踊っている姿である。

蘇州は杭州と並んで江南文化の中心地で、元末・明時代以来、文人画の町として名声を得ていたが、そのほかに音楽や演劇などさまざまな文化活動も活



- 1 踊り子
- 2 緋毛氈
- 3 横笛を吹く
- 4 琵琶を爪弾く
- 5 主人
- 6 上着（外套）
- 7 花瓶
- 8 客
- 9 肘掛椅子（靠背椅）
- 10 長机
- 11 暖帽
- 12 辮髪
- 13 腰格子戸
- 14 日除け（幔）
- 15 露台
- 16 欄干
- 17 築地塀
- 18 格子窓
- 19 簾
- 20 簾を開けて窺う
- 21 腰壁（檻牆）
- 22 瓦屋根
- 23 瓦座
- 24 垂木
- 25 大棟（屋脊）
- 26 鷗尾
- 27 折り畳んだ網代帆
- 28 帆柱（桅）
- 29 赤ん坊を抱く
- 30 苫（船篷）
- 31 舵
- 32 艫
- 33 棹を差す
- 34 鉢巻
- 35 上着（短衣）
- 36 たくし上げたズボン

発な町であった。当時の蘇州では、裕福な文人は邸宅に芸人を呼んで客とともに芸を楽しむ雅な習慣があったが、図はその宴席を表わしている。手前の建物のなかの女性は隣の賑やかな音楽と踊りが気になったのか、簾をあけて、外の様子を窺っているようである。

画面の上には何艘かの船が通っている。流れが

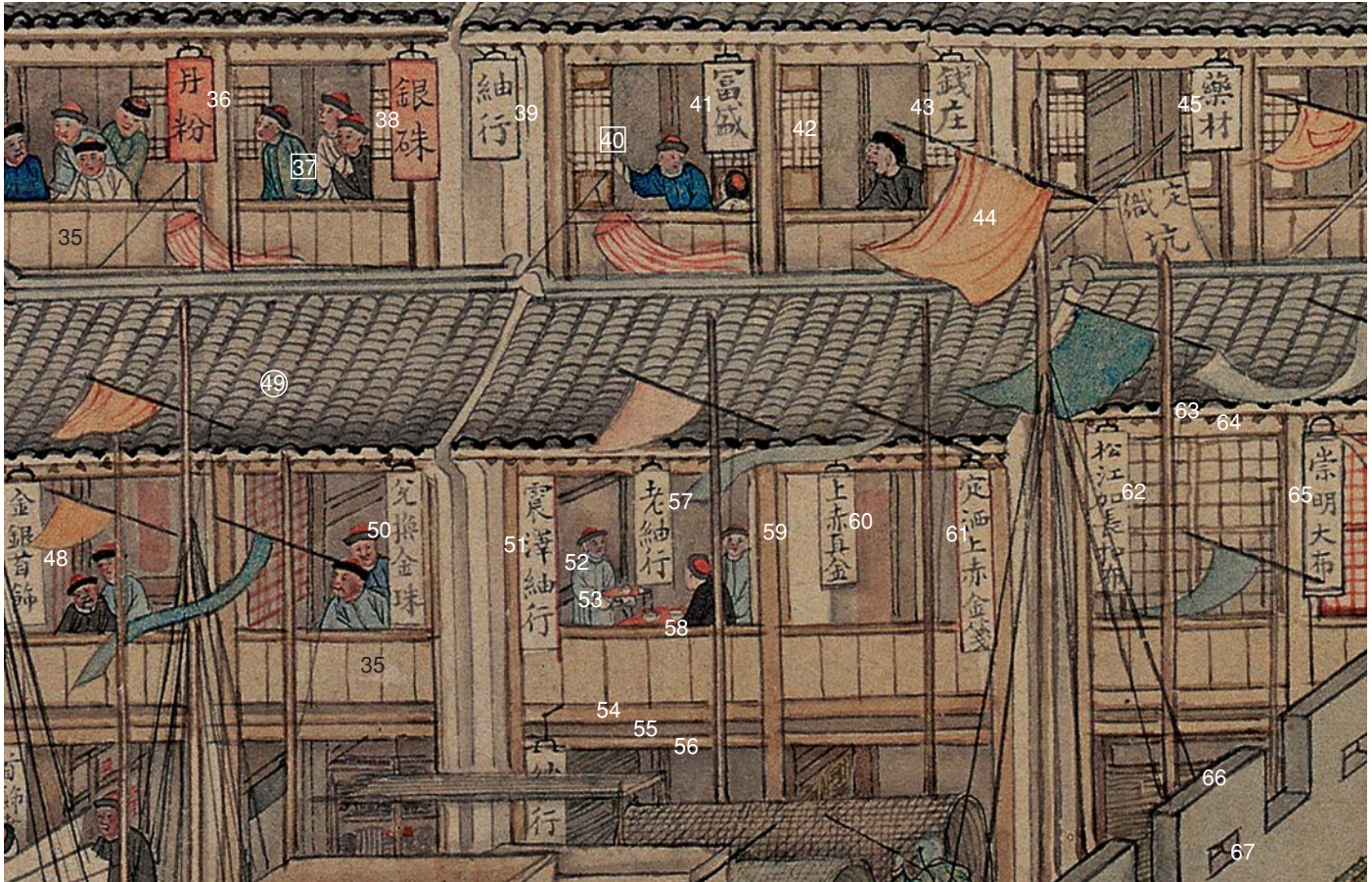
速いのか、それとも蘇州城に向かって急いでいるのか棹を差す水夫の動きが激しい。太鼓橋の懐胥橋を通ろうとして帆柱は倒され、網代帆も折り畳まれている。賑やかな水路の風景とは対照的に裏の邸宅では文人趣味の優雅な宴が広げられており、運河沿いの二つの対照的な光景を捕らえた場面である。

（金）

36 河岸の賑わい



- | | | |
|----------------|------------------|---------------|
| 1 煉瓦 (青磚) | 24 前包み (博脊) | 47 看板「手巾老行」 |
| 2 切り石 (条石) | 25 隅棟 (餞脊) | 48 看板「金銀首飾」 |
| 3 南門 [南の脇門] | 26 日除け (幔) | 49 二階建て店舗 |
| ④ 綱渡り (走索) の芸人 | 27 飲食店 | 50 看板「兌換金珠」 |
| 5 まげ (髻) | 28 看板「三鮮大麵」 | 51 看板「震澤絢行」 |
| 6 袖なしの長着 (半臂) | 29 凭れ掛かる | 52 店員 |
| 7 扱き帯 (汗巾) | 30 机 | 53 盆 (托盤) |
| 8 ズボン (褲子) | 31 客 | 54 長押 (額枋) |
| 9 脚絆 (裏腿) | 32 看板「麵館」 | 55 小壁 (門頭板) |
| 10 纏足 (小脚) | 33 看板「顔料」 | 56 鴨居 |
| 11 平衡棒 (平衡桿) | 34 看板「各種」 | 57 看板「老絢行」 |
| 12 綱 (索) | 35 羽目板 (檻牆) | 58 膳板 (榻板) |
| 13 支え棒 (架木) | 36 看板「丹粉」 | 59 通し柱 |
| 14 帽子 (暖帽) | 37 芸を眺める | 60 看板「上赤真金」 |
| 15 辮髪 | 38 看板「銀珠」 | 61 看板「定洒上赤金箋」 |
| 16 上着 (外套) | 39 看板「絢行」 | 62 看板「松江加長扣布」 |
| 17 長着 (袍子) | 40 指差す | 63 垂木 (椽) |
| 18 布製の長靴 | 41 看板「富盛」 | 64 長押 (檐枋) |
| 19 鴟尾 (正吻) | 42 格子窓 (檻窓) | 65 看板「崇明大布」 |
| 20 大棟 (屋脊) | 43 看板「錢莊」 | 66 狭間胸壁 (女牆) |
| 21 瓦屋根 | 44 帆柱に掲げる旗 (順風旗) | 67 銃眼 (砲眼) |
| 22 降り棟 (垂脊) | 45 看板「薬材」 | |
| 23 入母屋 | 46 看板「布行」 | |



蘇州城西北部の閶門の外にある南碼頭という河岸の賑わいを描く場面である。明清時代の閶門一帯は江南随一の商業区域であり、城門の南北に河岸があり、商船の停泊するところとして、各種の商業店舗や両替店、飲食店が密集しており、多くの人々で賑わっていた。

ここに描かれている店舗は全て二階建てである。その多くの店名に「行」が見られ、「牙行」、すなわち問屋であることがわかる。店舗は問屋の業務に適応し、一階は店で、二階は事務室として、それぞれに機能している。経営する商品は染料や生薬、貴金属などいろいろあるが、中でも、布や紬などの反物を取り扱う店が多い。さらに、「震沢」、「松江」、「崇明」などの産地を明記する看板が見られる。蘇州が江南地方の紡織品の主な集散地であることを物語っている。

最も目を惹くのは画面の左に見られる綱渡りの芸を披露する女性である。多くの観客に囲まれ、さらに周りの店の窓から、その芸を眺めて楽しんでいる人も少なくない。ここに描かれているのは綱を渡る女性一人のみであるが、明清時代の大道芸人の多くは旅芸人であり、家族または師弟で、小さなグループを組み、各地を転々として芸を売って生計を立てていた。閶門などの人が集まるところでの曲芸は、この画卷だけではなく、蘇州版画などにも、似たような光景が描かれている。そして、ここに見られるように、女芸人が重要な役割を果たしていた。

この女性の服装に注目したい。動きやすいように、丈の短い上着を身にまとい、長いスカートを用いず、膝のやや下しか及ばないズボンを穿き、脛に裹腿をつける。足が非常に小さく見えることから、纏足していることがわかる。(彭)

37 料理屋と屋形船

- 1 堀（囲牆）
- 2 切石積み（条石岸）
- ③ 苗を担ぐ
- ④ 桁型の石橋（方孔石橋）
- 5 木の欄干
- 6 桁石
- 7 橋杭（橋柱）
- 8 側壁（山花牆）
- 9 橋の下（金門）
- ⑩ 振り向く
- 11 看板「糧食油酒」
- ⑫ 指差す
- 13 穀物容器（草簀）
- 14 対聯
- 15 カウンター（柜台）
- ⑬ 凭れ掛かる
- ⑭ 二階の料理屋
- 18 看板「和合館」
- 19 提灯（宮灯）
- 20 提灯（紗灯）
- 21 椅子
- 22 羽目板（檻牆）
- 23 ハム（火腿）
- 24 棚（貨架）
- ⑮ 木造階段（楼梯）
- 26 親柱（扶梯柱）
- 27 手すり（尋杖）
- 28 蹴込板（起步）
- 29 踏板（踏歩）
- 30 看板「大肉饅頭」
- 31 酒甕
- 32 蒸籠
- 33 蓋
- 34 竈（立竈）
- ⑯ 屋形船（画舫）
- 36 巻き簾
- 37 提灯
- 38 高欄（欄杆）
- 39 帆柱に掲げる旗（順風旗）
- 40 帆柱（桅）
- 41 帆網（帆索）
- 42 繫船柱（將軍柱）
- 43 甲板
- ⑰ 四人で艚をこぐ（揺艚）
- 45 セがい
- ⑱ 継艚
- 47 艚腕（艚柄）
- 48 艚羽（艚板）
- 49 重ね
- 50 屋形（頭艚）
- 51 屋形（中艚）
- 52 屋形（後艚）
- 53 艚屋形（船艙）
- ⑲ 錨
- 55 鎖（錨鍊）
- 56 錨かけ（錨架）
- 57 舵



閻門から虎丘へは山塘河という運河が流れており、その両岸は山塘街と呼ばれる。山塘河及びそれにつながる小川の上に多くの橋が設けられている。画面左に見える橋は他の橋との位置関係や橋自体の方向から見ると、桐橋である可能性が大きい。しかし橋杭の上に板石を敷く作り方や木造の欄干は、同時代の作とされる「虎丘山塘図」での桐橋（アーチ型、石欄干）とかなり異なる。

橋の左側に水辺に面して二階建ての料理屋が建てられており、客は静かに川を見下ろしながら注文した料理を待っている様子である。橋の右に米や油、酒を扱う問屋があり、店内に藁（或いは竹）で作られた米を保存する籠が見られる。隣の料理屋「和合館」の二階に、大勢の客がいる。飾られている提灯

のデザインからみれば、小部屋3室に仕切られているようだ。ここだけではなく、「姑蘇繁華図」に描かれた料理屋はほとんど三間の二階建てである。一般的に客席は二階にあり、一階はカウンターや棚などが設けられ、酒甕が置かれ、だし用のハムなどがぶら下がっている。そして多くの場合、一階の外側に竈と蒸し器が設けられ、肉饅頭が売られている。これは通行人を引き付ける工夫でもあろう。今日横浜の中華街でも似たような風景が見られる。



店の前は船の停泊場となっており、食事をしながら遊覧できる屋形船「画舫」2艘が停泊している。手前の1艘は大勢の客を乗せて西の虎丘方面に進んでいる。動力はいわゆる継艫で、4人が力を合わせて漕ぐ大型なものである。人数が多いため、船縁からはみ出すせがいを足場になっている。山塘の閘門に近い所は会館や問屋など商業が中心であるが、虎丘に近づくにつれて観光地としての性格が濃厚となる。料理屋や屋形船には様々な形の提灯が数多く飾

られており、夜の賑やかさを想像させている。

やや時代を下った『桐橋倚棹録』（1842）を見れば、山塘の高級料理屋が集中するところは虎丘に近い斟酌橋あたりであり、そこで挙げられた店の名前は「虎丘山塘閘」でも確認できる。ここに描かれた橋の形が「虎丘山塘閘」の斟酌橋とそっくりであることを考え合わせれば、或いは作者は、意図的に飲食の繁盛ぶりを斟酌橋とセットで桐橋があるはずの位置に移して描いたのかもしれない。（王）

38 絵と音楽のある楼台



木洩鎮の街に差し掛かる西端部にある一軒の住宅で、二人の男性が向かい合い、弦楽器を演奏している場面である。棟に囲まれた左側の居住空間には3人の女性が話し合っているが、なかの一人の女性が水路沿いにある門に向かって手で指しているしぐさから、外出でもしようとする様子である。水路には小さい客船が何艘か行き来しており、船に乗って出

かけようとしているのか。蘇州の町は、水路沿いの土地を「下岸」、道を挟んだ反対側を「上岸」と呼ぶ二重構造であったが、描かれている住宅は交通の便のよい「下岸」に建っている。門から出るとすぐ水路につながっているため、多くの場合、水際に降りるための石段が設けられていた。それを「河橋」と呼び、井戸と同様に、近隣の人々が共同で利用し



- | | | |
|--------------|--------------|---------------|
| 1 楽器を演奏する | 15 欄干 | 29 屋形（頭船） |
| 2 三味線（三弦） | 16 石台 | 30 腰格子戸（榻扇） |
| 3 掛け軸（水墨山水画） | 17 辮髪 | 31 瓦屋根門 |
| 4 長椅子（榻） | 18 上着（短衣） | 32 障子（榻扇） |
| 5 こしかけ（杢子） | 19 帯（腰帯） | 33 花瓶 |
| 6 帽子（暖帽） | 20 スポン（褲子） | 34 袖なしの長着（半臂） |
| 7 植木鉢（盆花） | 21 櫓を漕ぐ | 35 扱き帯（汗巾） |
| 8 台（盆架） | 22 脚絆 | 36 スカート（裙子） |
| 9 鳥籠 | 23 布履 | 37 杖 |
| 10 瓦屋根 | 24 棹 | 38 鉢巻（包頭） |
| 11 大棟（屋脊） | 25 むぎわら帽（笠児） | 39 長着（袍子） |
| 12 鴟尾（正吻） | 26 腰を屈める | 40 上着（外套） |
| 13 庇 | 27 繫船柱（將軍柱） | |
| 14 柱 | 28 櫓網 | |

れた山水画である。蘇州は長らく杭州とともに文人画の町として知られていた。中国の文人画家は、職業画家と異なる作画を好み、題材、画風の選択において写意を表現する手段として墨戯を行った。画中画の掛軸の画風は、近景から地平線まで景物が広がる典型的な南宗画様式を示している。明代以降は、売り画生活をする文人が現れており、都市の商業経済力を背景に、当時はすでに職業として文人画風の絵画を制作していた町絵師が増えていた。「姑蘇繁華図」の作者徐揚も蘇州で名をなした職業画家であり、蘇州の知識人や裕福な商人に好まれていた文人画を熟知していたのであろう。掛軸は、小さく描かれた画中画でありながらも、当時の蘇州における文人画の画風がはっきり示されている点で、興味深い場面である。

たという。この図にみる家は、専用の「河橋」をもっているものと思われる。河に面している棟は前面が吹放しで、朱色の欄干に囲まれ、日よけの片隅には鳥籠が吊り下げられている。基壇には植木鉢も置かれており、ベランダのような機能を持つ場所であろう。

壁には掛軸がかけられているが、絵は水墨で描か

その掛軸の前には、長椅子に座り、弦楽器を爪弾いている男性が描かれている。こしかけにすわる向かいの男性も同様の楽器を演奏しているようである。おそらく蘇州独特の三弦であろう。蘇州では三弦と琵琶を弾きながら語りをつけて楽しむ芸があり、一般の人々が楽しむ音楽として広く流行っていた。清の乾隆帝の時代には、蘇州の弾き語り名人が宮廷にまで召されて演じたこともあったというが、その流行の様子が伝わる場面である。（金）

39 船着き場の書画売り



蘇州城胥門の前方にある官船用の埠頭に隣接した船着き場の一角である。停泊場は石造ではなく、土地がそのまま運河につながっていることから、庶民が利用する小さな船着き場であろう。画面の上部には煙草屋、そして露天に机と椅子をおいて手軽な食事をする饅頭の店があり、軽食をとる人々で賑やかである。画面中央には船から二人の夫が荷物を降ろしている。運ばれたものは、四つの大きい櫃や日用品であることから、引越しの最中のようなのである。

画面下にも何艘かの小船が泊まっており、小さい空間が賑やかで雑踏している。

船着き場にある建物の壁には、掛軸の絵がかけられている。売り物の絵であろう。掛軸の前には、後ろ手を組んでじっくり絵を覗いている人物、すでに購入したものなのか、巻物を脇に抱えている人物、絵を指しながら話し合っている人物などが描かれている。絵は、右から2幅は彩色による花鳥画で、左端の絵は単色による人物画のようであるが、年画の類



- | | |
|---------------|-------------|
| 1 書画の掛け軸 | |
| 2 後ろ手を組んで絵を観る | |
| 3 暖帽 | |
| 4 辮髪 | |
| 5 上着（外套） | |
| 6 巻いた掛け軸 | |
| 7 絵を指しながら話す | |
| 8 重盆 | |
| 9 雨傘 | 25 子供を抱く |
| 10 僧侶 | 26 日除け（幔） |
| 11 むぎわら帽（笠児） | 27 看板「大肉饅頭」 |
| 12 天秤棒 | 28 蒸籠 |
| 13 下げ緒 | 29 竈（立竈） |
| 14 長履 | 30 看板「各色名烟」 |
| 15 櫃 | 31 瓦屋根 |
| 16 重箱 | 32 大棟（屋脊） |
| 17 手提げ籠（籃子） | 33 鴟尾（正吻） |
| 18 上着（短衣） | 34 苫（船篷） |
| 19 帯（腰帯） | 35 帆柱（桅） |
| 20 ズボン（褲子） | 36 降ろされた帆 |
| 21 脚絆 | 37 上着（馬褂） |
| 22 布履 | 38 長着（袍子） |
| 23 歩み板 | 39 鳥籠 |
| 24 荷物を抱えて運ぶ | 40 鶏 |

特に蘇州の桃花塢年画は「蘇州版画」または「姑蘇版」と呼ばれ、人気を博し長崎貿易を通じて日本にももたらされた。

蘇州が江南の商業と経済の中心地に発展すると、絵画の需要も急速に高まった。従来は支配階層を中心とした一部の知識人の教養や文化として独占されてきた書画の購入と鑑賞が、購買力を身につけた庶民にも拡大され、新たな顧客を対象とした美術市場が形成されたのである。書画は、店舗を構えた商店ではなく、このような町の一角に設けられた露店でも販売されていることから、大量に生産された美術品が庶民の文化的欲求を満足させ、一般化していった様子が窺える。（金）

だろうか。そして、中央の1点と左から2番目の絵が水墨山水画であり、水墨画の中央の掛軸は書画軸である。町の職業画家による作画であろう。蘇州は文人画の町として有名であり、南宗画風的水墨画が主流をなしていた。他に、庶民の家を飾る絵として好まれた年画があった。年画は品質のよさで評判のあった蘇州の印刷技術を背景に、単色と多色刷りの版画が大量に制作され、年画は都会だけではなく、農村まで急速に普及し、消費された。そのなかでも、

40 庭園と「名人字画」





- | | |
|---------------------------------|-----------|
| 1 轆 <small>ながえ</small> を肩にかけて運ぶ | 12 盆栽（盆景） |
| 2 輿 <small>こし</small> 昇き | 13 苗木 |
| 3 轆 | 14 前掛け |
| 4 輿 | 15 船 |
| 5 竹細工物 | 16 籠 |
| 6 書籍 | 17 苫（船篷） |
| 7 看板「名人字画」 | 18 太湖石 |
| 8 対聯 | 19 日除け（幔） |
| 9 膳 | 20 四阿（亭） |
| 10 カウンター（柜台） | 21 八角の瓦屋根 |
| 11 手甲袖（馬蹄袖） | 22 宝珠（宝頂） |

蘇州城の閶門を北西に向かうと山塘橋に出る。そこを流れる山塘河の兩岸には山塘街の商店や民家が並ぶ。山塘街は文化の町として知られ、商店で取り扱う品物も書籍や書画、盆栽などいった知識人好みの高級品が多い。場面は半塘橋と普濟橋の間に展開する商店の様子である。右手の小船には盆栽と苗木が乗せられており、花卉や盆栽を商う店が多い山塘街の特徴を表わしている。左端に見える商店は、看板は見えないが、竹細工を取り扱っており、竹夫人と呼ばれる抱き籠のようなものも見える。画面中央に見える「名人字画」の店の棚には、書物が隙間なく積まれている。蘇州は文人の町として名が知られ、刻書、印書、文房具類、書籍、書画などは質が高く、官僚、商人、文人、そして外国からの使節も購入に訪れていたという。

商店の後ろには庭園が広がる。庭園の中央には八角の瓦屋根をいただく吹き放しの四阿が立ち、左側の庭園の入り口には特異な形状の太湖石たいこせきが置かれている。太湖石は、よりねじくれ奇妙な姿をした石灰岩である。浸食により、穴があき、細かく削られ、表面には自然な形の皴しゆんがあらわれ、また峰、洞窟、溪谷にも形似しており、その奇妙な形は唐の時代から愛好され、奇石愛玩の風潮から庭園の假山として広く普及していた。ここにみる庭園は、江南地方の庭園作りによく用いられる太湖石が假山として用いられているが、全体としては、自然の景色を生かした素朴な庭園である。（金）

41 水路を進む嫁迎え

- | | |
|--------------|-------------------|
| ① 嫁迎えの同行人 | 31 土瓶（水壺） |
| 2 冬用の帽子（暖帽） | 32 棹を差す |
| 3 赤い絹（紅綾） | 33 鱧屋形（船倉） |
| 4 上着（外套） | 34 突上げ窓（支窓） |
| 5 長着（袍子） | 35 倒した帆柱 |
| 6 長履（靴子） | 36 欄干 |
| 7 嫁迎えの輿（花轎） | 37 折り畳んだ網代帆 |
| 8 飾り用の提灯（彩燈） | 38 屋形（中艙） |
| 9 轆 | 39 窓（檻窓） |
| ⑩ 先払いの人 | 40 簾 |
| 11 桴（槌） | 41 船縁（舷） |
| 12 銅鑼（金鑼） | 42 天秤棒 |
| ⑬ 水夫 | 43 下げ緒 |
| 14 屋形（頭艙） | 44 上着（短衣） |
| 15 幟（幡） | 45 脚絆 |
| 16 葉玉（結彩） | 46 布履 |
| ⑰ セがいで櫓を漕ぐ | 47 看板「蘇杭雑貨」 |
| ⑱ 楽隊 | 48 扇子 |
| 19 鑊鈸 | 49 看板「各色雅扇」 |
| 20 月鼓 | 50 芭蕉扇 |
| 21 喇叭 | 51 番頭（店主） |
| 22 低音喇叭（銅角） | 52 料理を運ぶ |
| 23 繫船柱（將軍柱） | 53 手を握って話す |
| 24 錨 | 54 宣伝文句「本店包辦各色酒席」 |
| 25 舳先 | 55 看板「上卓饅頭」 |
| 26 儀仗 | 56 絹張り提燈（紗燈） |
| 27 箆 | 57 日除け（幔） |
| 28 むぎわら帽（笠兒） | 58 瓦屋根 |
| 29 腰掛（板櫂） | 59 破風（博風） |
| 30 植木鉢（盆花） | 60 看板「包辦酒席」 |



太湖から靈岩山の麓を通り抜けたところに賑やかな商店街の木洩鎮が広がる。両側を商店に囲まれた運河に華やかな輿をのせた一艘の船が通っている。舳先の甲板に置かれている輿は鮮やかな紅色で彩られ、緞子や縮緬などで飾りつけられていることから、紅事と呼ばれる結婚式に使われる花嫁の花轎であろう。場面は、花轎に乗せる花嫁を迎えに行く親迎の一行を描いている。運河を進む船の右前方には、楽隊をのせた小船絵が並走し、鑊鈸、月鼓、銅角、鎖呐などの楽器を鳴らしている。先頭に立つ男性は喇叭を高々とあげて演奏しており、賑やかな親迎の行列を演出しているようである。

親迎とは、婚姻儀礼のうち、婚礼の当日、新郎が新婦を迎えに新婦の家にむかい、新婦を婿の家に連



れてくることである。『清俗紀聞』に描かれた嫁迎えの行列では、^{かつどう}喝道と呼ばれる先祓い、提燈持ち、楽隊を先に、仲人の輿、花嫁を乗せる花轎、新郎の輿がその後ろに続いているが、この場面では、水郷の蘇州らしく、花轎を船に乗せ、金鑼を敲く先導役を舳先に立たせて水路を進んでいる。

新郎は船室の中にいるとの設定なのか、図には描かれてはいない。花嫁用の花轎は、花嫁を迎えるためなので空になっているか、小童をのせていくことも多かったという。花轎の隣に、襁のような朱色の布を首の周りにかけている3人の男性が立っている。親迎に加わる媒人なのか、それとも執事なのか。船の中央にある船室に描かれている2人の女性は、乳母であろう。

花轎には色鮮やかな提燈がいくつも吊り下がっている。房のような飾りが付けられている鮮やかな紅色の小さな燈籠である。『清俗紀聞』が伝える嫁迎えの行列には、明け方で暗いため松明や提燈持ちが同行されているが、この場面にみる華やかな提燈は、暗い道を照らす明かりとは考えられない。古代の中国では、婚礼は「昏に行う礼」の意味があり、嫁迎えに提燈が飾られるのは、「昏に行う礼」に由来しているとされる。蘇州は宋代以来、燈籠の産地として知られていたが、花轎に付けられた提燈は単なる明かりの機能を越えた、婚礼に欠かせない飾りとして蘇州の人々に好まれた様子が窺える。(金)

42 婚礼



婚姻儀礼のなかの、新婦を迎え入れる婚家で花嫁が新郎の両親に拝礼をする儀式を描いた場面である。新婦が新郎の家に着くと、庁堂で天地の神に礼拝し、その後祖先を祀る家廟で礼拝をして、最後に両親に礼拝をする儀式が行われる。華やかに飾られた紅色の花轎はすでに新婦を婚家に運んで中庭に停まっており、新婦は添い嫁に付き添われ、身をやや屈めながら堂上に座る両親に礼拝をしようとしてい

る。横に立つ新郎は深々と跪拝している姿である。2人ともめでたさを象徴する紅色の上着で身を包んでいる。花嫁は披風袂衣という上下の日常服を着て、その上に緋色の上着（円領）をあおっている。頭には頭面覆とうめんほという被かづぎのようなベールを、顔が見えないようにすっぽりかぶっている。

庁堂のなかと中庭で樂士が音楽を鳴らしているなか、一家の親戚、友人、客らが大量集まっており、



- | | |
|----------------|---------------|
| ① 新郎 | 29 嫁入り道具 (粧奩) |
| 2 新郎の上着 (吉服) | 30 喇叭 |
| ③ お辞儀をする | ③① 庁堂 |
| 4 緋毛氈 | 32 瓦屋根 |
| ⑤ 新婦 | 33 瓦座 (封檐板) |
| 6 ベール (蓋頭紅) | 34 垂木 (椽) |
| 7 新婦の上着 (披風) | 35 対聯 |
| 8 長衣 (襖衣) | 36 欄干 |
| ⑨ 礼をする (万福) | ③⑦ 外庁 |
| 10 新郎の母 | 38 唐戸 (榻扇) |
| 11 打掛 (披風) | 39 基壇 |
| ⑫ 新郎の父 | 40 耳石 (垂帶石) |
| 13 添い嫁 (養嬢) | 41 葛石 (階条石) |
| 14 仲人 (媒人) | 42 束石 |
| 15 絹張りの提灯 (紗燈) | 43 乱積み (乱石岸) |
| 16 雲鑼 | ④④ 拱手の礼をする |
| 17 横笛 | 45 高張り提灯 (檠灯) |
| 18 飾り暖簾 (彩綱) | 46 辮髪 |
| 19 薬玉 (彩球) | 47 上着 (短衣) |
| 20 角頭巾 | 48 帯 (腰帶) |
| 21 袖なしの長着 (半臂) | 49 ズボン (褲子) |
| 22 扱き帯 (汗巾) | 50 布履 |
| 23 スカート (裙子) | 51 冬用の帽子 (暖帽) |
| 24 芭蕉扇 | 52 上着 (外套) |
| 25 日傘 (陽傘) | 53 手甲袖 (馬蹄袖) |
| ②⑥ 嫁迎いの輿 (花轎) | 54 輿 |
| 27 飾り用の提燈 (彩燈) | 55 轆 |
| 28 提燈 | 56 長着 (袍子) |
| | 57 布履 |

賑やかさがあふれている。婚礼後の酒宴が用意される外庁にも、人々の出入りが目立つ。門外には、人々が乗ってきた輿が一行に並んでおり、輿かきはながえ轆に腰掛けていたり、地面に座っていたりしながら、帰りを待っている様子である。

中庭には二人の男が朱塗りの箱を運んでおり、門外にも同様の箱が置かれている。粧奩と呼ばれる嫁入り道具であろう。嫁入り道具は化粧箱、花瓶、茶

器などの家具什器と、衣類など嫁に必要なものが含まれた。門外の高張り提燈の前で二人の男性がやり取りしている紅色の封筒は、おそらく嫁入り道具の目録であろう。婚礼に関わるさまざまな行事が異時同図的に描かれており、婚礼の様子を充実に伝えようとする絵師の意図であろう。(金)

43 山上の宴会



- | | |
|-------------|-------------|
| 1 酒を飲む | 14 布靴 (布鞋) |
| 2 毛氈 | 15 手をつく |
| 3 画仙紙 | 16 足を組む |
| 4 硯 | 17 桃の花 |
| 5 水滴 | 18 駕籠 |
| 6 筆を持つ | 19 駕籠かき |
| 7 ちろり (錫酒壺) | 20 話しかける |
| 8 岡持(食盒) | 21 笠 |
| 9 召使 (小厮) | 22 煙草を吸う |
| 10 帽子 (暖帽) | 23 上着 (短衣) |
| 11 長着 (袍子) | 24 絡げた裾 |
| 12 帯 (腰帶) | 25 ズボン (褲子) |
| 13 靴下 (襪子) | |



時は春、桃の花が多く描かれていることから、清明節よりは少し早い季節であろうが、文人たちが「踏青（春の郊外散策）」に出かけてきたものと思われる。場所は霊岩山の麓の小高い丘である。三人の文人は毛氈を広げ、召使いに給仕をさせながら飲んだり食べたりしている。更に一人の文人が画仙紙を広げ、墨を擦り、筆を執って絵を描き始めた。他の二人の文人も召使いも、絵の出来映えをじっと見ている。文人の宴会の場所から少し下ったところに、文人たちを載せてきたのであろう駕籠が三台と、駕籠かきが六人描かれている。

この時代、蘇州からここまでは舟で来るのが一般的であり、かつこの丘に登るためにわざわざ駕籠に乗るとは考えにくいので、霊岩山の名刹霊岩寺に参

詣した帰りではあるまいか。

注目されるのは、絵を描いている文人の前に座った人物が、右手をついて、首をかしげるようにして見ていることである。これは正面から見れば逆さまに見える絵を、なるべく描いている人物の側から見ようとしたためにこうした動作になったと思われる。ここでの画家の観察は実に細かい。

また駕籠かきの方の描き方も面白い。一人の年輩の男がしょげ返っている若者の肩を叩きながら励まし、もう一人の年輩の担ぎ手が残りの三人に諄々と諭しているかのように見える。あたかも日常生活の中でしばしば見かける情景であるかのように、文人の華やかな雰囲気と駕籠かきの生活ぶりの対比が鮮やかである。（鈴木）

44 虎丘とその門前



蘇州城の西北に位置する虎丘の俯瞰図である。「姑蘇繁華図」の巻末に置かれた図である。太湖から始まり、霊岩山、木洗鎮、石湖を経て、蘇州城に至り、城壁に沿って北上し、閻門から蘇州城を離れて、山塘川に沿いに西北へ向かい、終点の虎丘に達

する。虎丘はわずか海拔30メートルの丘であるが、低平な地域にあってはランドマークになるような重要な場所であった。虎丘は山全体が雲岩寺という禅宗寺院であり、山頂部には雲岩寺塔（虎丘塔）が建てられている。現在の塔は1956年から補修された



- 1 「雲岩寺塔」
- 2 九輪
- 3 多層塔
- 4 「大仏殿」
- 5 「禪堂・方丈」
- 6 「萬歳楼」
- 7 「御書亭」
- 8 「天王殿」
- 9 「花神廟」
- 10 「二山門」(断梁殿)
- 11 袖石
- 12 アーチ門
- 13 占い師看板「命相」
- 14 居酒屋看板「酒館」
- 15 茶店看板「茶室」
- 16 切妻
- 17 瓦屋根
- 18 竹器店看板「竹器」
- 19 苫(船篷)
- 20 船上生活者
- 21 舵
- 22 旗棹
- 23 罎
- 24 太鼓橋(単拱石橋)
- 25 欄干
- 26 艚を漕ぐ
- 27 格子窓
- 28 鴟尾

ものであるが、塔は傾いており、斜塔と呼ばれている。

図は雲岩寺塔とその周辺に建てられている大仏殿、萬歳殿、天王殿などを遠景で描いている。そこから丘を下ってくる間にも多くの信仰施設があり、下りきると二山門がある。その両側には山塘川に面

して商店が並んでいる。参詣客を主とした老若男女相手の食堂や土産物店を中心としている。キャプションで付けた各建物の名称は、雲岩寺塔以外は『虎阜志』記載のものを採用した。(福田)